

漢語音韻学国際会議に参加

—— 革命の最後の聖地、西柏坡 ——

望 月 眞 澄

2002年8月25日受付、26・27・28日と3日間にわたり、河北省石家荘で中国音韻学研究会第12回学術討論会・漢語音韻学第7回国際学術検討会が開かれた。私は招かれてこちら日本を24日に発ち、29日に帰ってきた。

私は26日午後に《『洪武正韻』依拠方言こそは温州字音》という論文を発表した。また28日午前、司会兼批評という立場で約2時間を蘇州大学の若手、張玉来氏と受け持った。

私の論文は自分でも断わっておいたが、従来の、「該書の依拠は明代の最小公倍数的讀書音」に対して大胆に確信を持って、注目すべき論題にしたために、吉林大学の寧繼福教授が真っ先に真っ赤な顔をして反対してきた。それを社会科学院語言研究所名誉教授、楊耐思先生がたしなめるといった場面もあり、当事者ながら、なればこそ(?)思惑が当たったかと観察していたのである。

その後、晩餐会では中山大学名誉教授の羅偉豪先生は1931年生まれ、天津大学の韓品夫先生は33年生まれ、私は32年生まれで、「それじゃ盟友、兄弟じゃん」てな次第で石家荘産の白酒(ブランデー)を酌み交わした。その席でも、「望月先生の学説を支持するよ」とみな言ってくれたのが嬉しかった。

この学会のメンバーの関心事は多面にわたり、発表総数120点くらい、参加者は300人以上いただらうか。今は、その詳細の紹介は割愛しておきたい。

盟友は日中戦争中に、「アイウエオを勉強させられたよ」「おれは日本語のイチ・ニ・サンが言えるよ」などと暗に日本帝国主義を非難しているように聞こえることも話題にしていた。

27日午後に平山市にある、新中国成立直前の1949年、中国革命最後の根拠聖地を訪問し、毛沢東・周恩来・朱徳などが深夜まで作戦を練ったであろう小さな部屋を見学することが今なお大切という印象をここで受けることになった。

穴蔵を 早く離れん 梨熟す

この中庭にやせた梨の木が植えてある。梨がなっている。「離開」「梨樹」を掛けて幹部の夫人の誰かが植えたかも知れない。

はじめ私は、平山市なら古代遺跡、中山王の博物館などの見学がいいなと考えていたが、河北省の考えの方が有力に作用しているのかも知れない。ある先生が経済面で河北省は落伍者となったという意見もなぜかここで結びついてくるような感想を持った。
